

北島八穂(きたばたけ・やお)☆常設展示作家

1、北島八穂の生涯

<生涯1 マヨコから少女期へ> 0歳～13歳 1903～1916

両親の住む青森市から2キロほど山手に入った造道村字古館(現在は青森市に合併)に祖父母の隠居所があった。ここで過ごした楽しい思い出を八穂は繰り返し作品化している。週末になると待ちかねたように一目散に古館に駆けつけた。6軒きりの村の端に1200坪の屋敷があり、南に八甲田山、西には岩木山を眺めながら、ここでの八穂は『マコチン』のように自然児になれた。祖父母の出身新潟では、「かわいい子」のことを「マヨコ」とよんだことにちなむ。冬になると寝床の中で吹雪の音を聞きながら祖母の昔話を聞いた。『耳のそこのさかな』の原点である。またこの祖母からはキリスト教への信仰心も引き継いだ。10歳の正月、祖母は亡くなり、八穂は1学期間学校を休む。

<生涯2 文学の芽生え> 14歳～23歳 1917～1926

大正6年、青森県立青森高等女学校に入学。理数系の専門学校に行くつもりだったが、女子のための門は開かれていなかった。その頃国語の木村はなか先生が作文をほめてくれた。その後、白樺派やロシア文学など兄姉の本箱のものを乱読した。17歳の春、「主婦の友」の懸賞作品に応募して当選。文学への興味よりも賞金の魅力の方が強かった。長兄の勧めで下田歌子の実践女学校高等女学部国文専攻科に進むが、2年で中退する。理由の第一は校風になじめないこと、第二は青森市大火後、実家の材木店経営不振のためであった。八穂は代用教員の道を選ぶ。後の『あくたれ童子ポコ』の背景である。それから2年目の冬、脊椎カリエスが発病、宿痾となる。

<生涯3 結婚と宿痾、苦しみの代作時代> 24歳～41歳 1927～1944

昭和3年、雑誌「改造」の懸賞小説に応募するが落選。しかし、審査員の一人だった佐藤春夫がほめてくれた旨の手紙を、当時「改造」の編集員の深田久彌からもらう。八穂は上京を決意し、文学の道を志す。やがて深田久彌と「私流の結婚」をする。「津軽の野づら」「オロッコの娘」など多くの作品を夫の名で発表した。津

軽のエスプリがあふれている作品の原作は八穂自身なのだが、知名度もなく、生活を支えねばならなかった。30代半ばからカリエスが悪化、7年間は歩行不能となる。八穂は病床で蛙のようにうつぶせになりながら「鎌倉夫人」「知と愛」などを書いた。昭和15年深田家に入籍。久彌との同居から10年後であった。昭和19年父慎一郎死去。

＜生涯4 児童文学作家北畠八穂の誕生＞ 42歳～70歳 1945～1973

昭和20年、戦争は終わったが、八穂にとっての戦いは内にあった。「自在人」が北畠八穂の名で初めて発表され、翌21年児童文学処女作「十二才の半年」が掲載されると八穂は作家として注目を浴び、「銀河」「ひまわり」などの諸誌に相次いで作品を発表する。この年奇跡的に歩行が回復したが、八穂は夫の不実を知る。昭和22年深田久彌と離婚。この痛みの中で八穂は書くことによって自分を蘇生させた。昭和23年鎌倉山に数奇屋風の家を建て、内弟子白柳美彦との生活が始まる。昭和45年青森出身の高校野球名投手を描いた『小説太田幸司』を書き、昭和47年には『鬼を飼うゴロ』により第10回野間児童文芸賞、第19回サンケイ児童出版文化賞大賞を受賞する。

＜生涯5 郷愁と回顧の時代＞ 71歳～78歳 1974～1982

『津軽野の雪』は八穂の没後、昭和57年12月内弟子として彼女の死を看取った白柳美彦の手によって編集、出版された随筆集である。白柳によると『耳のそのさかな』は八穂が残したささやかな天国への旅歌であり、未完の絶筆「津軽の婆さま」はその旅の途次の峠にとどめた最後の旅日記であるという。青森大学出版局の雑誌「青森 Now」に昭和47年から連載したエッセイには鎌倉文士交遊録として「太宰治」ら約20人の文士たちの姿が躍如として描かれている。昭和49年の『青森県立青森高等学校史「無限」』に「鳩コの啼く校舎」と題して寄稿、恩師や友人の思い出を綴っている。『明りになったかたつむり』には八穂の分身を感じる。身を尽くし、明りをとす愛の実践家としての北畠八穂であった。

2、北畠八穂の代表作

○「十二才の半年」

児童文学のジャンルでの処女作で、昭和 21 年 10 月、少年少女雑誌「銀河」の創刊号に発表された作品です。「もえてゐる星のなかにはいつてみた人があろうか」という大胆な表現で書き始められているが、これは空襲で火の海と化した東京の街を表現した文です。主人公のジュロウ少年の父はすでに海で戦死し、母と妹はこの火の海の中で行方不明となり、少年は気がついた時は重傷を負い病院に入れられていたのです。父母を恋い慕って泣いている少年を医者のカッパ先生が励ましてくれます。先生は「千年生きた目一つ」という童話を読んでもくれますが、この童話は後に八穂が作品化しています。少年は周囲の人々の暖かい心に力づけられ、新しい出発をします。作者自身長い間の病魔と心の痛手から立ち上がりかけていた頃の作品ですから、少年が亡き両親や兄弟の分まで生きようと願う気持ちが実感となって強く読者に伝わってきます。

○『マコチン』

この作品は 1948 年から 49 年にかけて雑誌「光の子供」に連載された。「マコチン」は作者自身のことで、父の出身地新潟の方言でかわいい子のことをマヨといい、コをつけてマヨコ、縮めてマコとよばれた。5つの短編から成る自伝的作品で家族をはじめ実在のモデルが生き生きと描かれているが、事実よりも真実に近い形で想像の翼を広げて書かれている。「マコチン虹製造」は自由にのびるズイコのようなマコ。「こじきマコチン」は想像力で小屋を御殿にしたり、小鳥や虫の声が美しい世界をつくったり、「ぬすびととリンゴをわけたマコチン」は無邪気な子供の話が泥棒を感動させ、「エスさまになったマコチン」、「雪と降ってきたエスさま」はいずれもキリスト教信者としての八穂の、エスさまのように奇跡がしたいという願いがあふれている作品である。八穂のペンは常に谷底に住む主人公にふしぎな光をあて幻想的な詩の世界に変えてしまう。

○『耳のそこのさかな』

出稼ぎに行く両親が祖母にしがみついて見送るマヨコに言います。「百人前おもしろくしてな」と。9つの短編から成るこの作品のいずれもが祖母の昔話やわらべ唄。祖母の急死によってひとりぼっちになった物語の主人公マヨコはおじいさんの家に引き取られることになり、おじいさんの背中の上で思い浮かべるのです。マヨコの耳に降る雪は昔話を語るおばあさんの声となり、尾ひれなびかせて泳ぐ魚の

群れのようにさやさやと囁くのです。ぞうすいをカニやエビ味に変える百人力の祖母。ない所から何かを生みだしてしまう不思議な力は、貧しさゆえの知恵袋なのです。リ、リ、リと鈴の音させて降る雪はこんど生まれてくるものの魂を運んでくるといふ。いろりを囲んで祖母と話した物語が今も八穂の耳の中でさやさやと音を立てているのです。モデルは八穂自身の祖母なのです。

○『鬼を飼うゴロ』

「だれでも心の中をよくしらべたら、鬼の半ぴきーぴきはいるでしょう。鬼はわるです。しかし、この鬼を追い出そうとばかりせず、人の知恵で特異なかわいい、面白い、たくましさにしたてあげて、つねに自分と競争させ、問答させ、鬼の鬼力を役に立てられないものでしょうか」と作者は言います。この作品には昭和47年にサンケイ児童出版文化賞大賞と野間児童文芸賞を贈られました。作品の主人公は吾郎、通称ゴロ。東北の山村に住む一家で祖母、父母、姉の5人家族、父は炭焼きをして生計を立てているのですが、姉は精神障害者で、彼女を助ける両親の愛が逆に運命を狂わせてしまいます。貧困、迫害、両親の死別と続く苦しさの中でゴロは耳のなかにポンチという子鬼を飼ってたくましく生き抜きます。ゴロがくじけそうになると励まし、迷っていると知恵を貸してくれます。こんな道づれがいたらいいのにと読者に思わせてくれる作品です。

3、北畠八穂のキーワード

<キーワード1 ズイコのズイ>

「すなほな梢は木のズイコから伸びたんだよ。ズイコはやはいから、自由(すき)に伸びられるよ。やはいズイコは木のしんからだよ。梢はまだまだずうっと伸びるよ。芽をふき、葉を出し、花を咲かすよ。だから梢はゆらぐよな。」これは20代の頃の八穂の詩である。「ズイコ」とは若木の髓のことで、木が伸びてゆくための柔らかな芯である。『津軽の野づら』の中の一章「志乃の手紙」にも「すなおな山の木のズイコの好きな志乃のことばはズイコのズイでございます」と書かれている。明治初期からのキリスト教の家に生まれ、賛美歌をうたっているうちに体内に稲妻のようなものが走り、それ以来八穂の心は真直に育った。病魔と破婚の苦しみを克服でき

たのは、八穂が若木のように柔らかい心を養っていたからである。旧約聖書の「涙と共に播くものは歡喜(よろこび)と共に穫(かりと)らん」という詩句が好きだという。病気を飼いならし、涙が土に滲み、緑の葉が芽ぶく、八穂のみずみずしい心を感じる。

<キーワード2 病気の健康>

北島八穂の生涯を考えると、「病気」という二文字を抜きにしては語れない。全く無病なのは満 12 歳から 19 歳までの7年間だけであったという。「病気」という随想の中で「病気を長くしていると、病気の健康というものがひとりで生まれてくるものらしい。いったい私は末っ子のトクで、たいていどんな境界に落ちても、不自由をあんまり感じない性だ。いやでたまらないことは、さっさとしまつしてしまわずにいられない。そのかわり、いま住む境界からは、何か収穫をみつけないければ気がすまない」と書き、また「ひどい痛みの中から私がつけたものは、わが身がしみじみ生きていけるということだ。健康な時に、あると知らずに使っていた足が、確かに在るとはっきりしたことだ。生きている以上、足が在る以上、どんなに痛くとも、これからどうなってゆくかと、未来を持てる探検欲を出せることだ」とも言う。八穂一流の再生の哲学と言える。

<キーワード3 『透きとおった人々』>

『透きとおった人々』は故人になった作家 20 人の思い出を綴った作品である。この本の前書きで八穂は「あなた方は透きとおってしまった。透きとおったままに、あなた方はなおありありと見えてきたところがあります。」と書いているが、この透明感はやや飛躍的と思わせる詩的比喩表現の中でもみることができる。例えば『耳のそこのさかな』。祖母の昔話の語り声が八穂の耳の底で聞こえるのである。人は死ぬと形はなくなる。けれど魂は透明になってゆれているという。詩「はじめに来る人」の三連目の一部に「こごめの花も白鳥も、つぼみ、ことりになる未だ前のただ白い透きとおった光のような魂の時」とうたっているが、人も鳥も未生の時は透きとおって無垢なのである。降ってくる雪がその未生の命を運んでくるという。透明なものへの憧憬、現世にあってなお十和田湖の水のように空の青も樹々の緑も映し出す清流のきよらかさを八穂は願っていたのであろうか。

4、北畠八穂のゆかりの場所

①八穂(本名美代)出生地付近

堤川にかかる旭橋(旧弁慶橋)(青森県青森市)

満6歳頃までは港町界隈にあった父の官舎(青森大林区署、現在の営林署)で秋の終わりから雪解けまで過ごし、春から夏には祖父母の隠居所にいた。青森市の中央を流れる堤川にかかる欄干に擬宝珠のついた弁慶橋(現在の旭橋)で陣取り、石けりなどして遊んだ。飴売りのヤッチャアメ親父が来て指人形を舞わせ、笛太鼓ではやした。

②『マコチン』など童話作品の背景

隠居所跡地と墓地(青森市古館)

6軒しかない村の端に1200坪の屋敷に祖父母の隠居所があった。門にはアカシアの大木、果樹園や花畑が広がり、大川が流れ、川向こうの五連隊からはラッパの音が聞こえた。「もどったかァ、マヨコ」大手を広げて迎える祖母の笑顔。童話の原風景である。北畠家代々の墓に八穂は眠っている。

③八穂の代用教員最後の勤務校

浅虫小学校(旧浅虫尋常高等小学校)(青森市浅虫)

八穂は21歳から1年3ヶ月間、浅虫小学校で代用教員をした。1年生の担任で『あくたれ童子ポコ』の世界を体験する。本陣「柳の湯」は幼い頃母と湯治に行った縁で、作家になってからもしばしば逗留している。地方紙の連載小説を書いた時や精神の痛手を負った時などこの土地はいつも彼女を暖かく包んでくれた。

④八穂の晩年の住居

鎌倉山若松の数奇屋風の家(神奈川県鎌倉市鎌倉山若松)

鎌倉駅からバスで約10分。若松のバス停から歩いて数分の小高い山の頂に石垣のある門が見える。門柱には小鳥の巣箱の形の表札があり、北畠・白柳と書いてあった。真西に富士山、その右に丹沢、左に箱根、近くに江ノ島、遠くに大島と八穂自慢の風景に包まれた数奇屋風の家。白柳美彦と共に30有余年を過ごした終の棲家である。

5、北畠八穂の関連人物

☆北畠きつ: 祖母

『耳のそこのさかな』の「百人前おばあちゃん」のモデルでもあり、八穂にとっては限りなくやさしい大好きな祖母であった。母が病身であったため、青森市郊外の古館の祖父母の隠居所で過ごす日が多かった幼い八穂は、寝物語に祖母から遠い先祖北畠親房の話や謡曲「鉢の木」、「羽衣」ほか軍記物語、はては民話などを聞かされた。雪の夜に祖母と2人だけのクリスマスを迎え、コタツの上で手造りの山ぶどう酒を飲み、キリストの話から信仰心を育てられた。祖母きつは「北畠屋」という呉服商を営む八穂の祖父興三郎のもとに嫁した。曲折を経て青森に移住。八穂の耳には生涯、魚のひれのようにさやさやと語る祖母の声が聞こえ、それが童話の源となった。

☆北畠いよ: 母

母いよ(伊代)は弘前市西大工町出身である。官吏として弘前に赴任した父が宿をとったのが今も残る「石場旅館」であり、その宿の主の血縁であったいよと結婚する。17歳で嫁いだ母には女中ヨシコをつけ、峠の茶屋で別れる時、祖母は涙を流しながらワラジの紐を結んでやったという。嫁してからは北畠家代々のキリスト教の影響を受け、生まれた子が乳児期に相次いで死亡するという悲しみが信仰心をより強くした。大家族の家事一切を切盛りする母の楽しみは姑と縁側に出て和歌を詠み合うことだった。50代半ば難病にかかり6年間寝たきりとなったが最期まで微笑を絶やさなかったという。八穂の信仰心と病気に向かう強さはこの母の影響が大きい。

☆深田久彌: 夫

昭和3年、八穂が「改造」の懸賞小説に応募したのが縁で深田久彌を知る。翌4年には2人の新生活が始まる。当時、久彌は改造社に勤務、その傍ら川端康成、横光利一らと雑誌「文学」を創刊、「オロツコの娘」が雑誌「文芸春秋」に掲載されるや深田久彌は一躍文壇の注目を浴びる。続いて発表した「津軽の野づら」ほか数作の小説に限って言えば、久彌作となっただけに原稿は八穂である。生活の

資を得るための手だてであった。2人の結婚は八穂病弱のためもあり許されず、久彌の父死去後の昭和15年、入籍。同居から10年経っていた。しかし、久彌にはすでに一児をなした女性があり、終戦後久彌が除隊の翌22年離婚。この破局から作家北畠八穂は誕生した。

☆白柳美彦:内弟子

「ぼくが死んだらどうします。この血圧ではほんとうにわからない。あと、だれが見てくれるかなあ」「あなたが死ねばわたしは自然に死ぬでしょう。食べ物を運んでくれる人もないし、親鳥が死ねば子鳥は死ぬ」これは八穂没後に白柳氏が編集出版した八穂の随筆集『津軽野の雪』のあとがき「北畠八穂その死、人と文学」にある会話文である。白柳氏は東大卒、哲学専攻、空手部の偉丈夫で八穂の甥の友人であった。昭和23年鎌倉山の八穂宅に弟子として入り、以後30有余年は八穂のために捧げられた。翻訳、評論、童話も書き、不自由な八穂の身の世話、そして彼女の心身の苦しみを分かち合った。八穂の死を看取り、平成4年3月病没。享年71歳。

6、北畠八穂の資料紹介

○耳ぞこに住む魚まだこぬ音をひれふりてよぶ 八穂
書画(色紙)

272mm×241mm

童話『耳のそこのさかな』(昭和43年刊)は、のち映画化され「マヨコに雪が降る」として公開された。(北畠道之氏寄贈)

○「七穂の経営」

原稿

1928(昭和3)年～1932(昭和7)年頃

195mm×135mm(×71枚)

北島美代(本名)が消されているが初期の珍しい原稿である。改造社のシールがかすかに見えており、昭和3年雑誌「改造」の懸賞小説に応募したものが、大切に保存されたものか。(北島道之氏寄贈)

○昭和 21 年日記

著作資料(日記)

1946(昭和 21)年

238mm×161mm

和綴本に毛筆で書かれた日記(一部鉛筆書き)。昭和 21 年5月 17 日から 10 月 30 日まで書かれている。(北島道之氏寄贈)

○北彰介宛(昭和 44 年5月 10 日付)書簡

書簡

1969(昭和 44)年5月 10 日

215mm×182mm(×2枚)

北彰介は青森県児童文学研究会の代表者で、北島八穂と往復書簡が多数残されているが、その一通。津軽弁で書かれた八穂の書簡は、まことに郷里への愛情に満ちているものばかりである。(北彰介氏寄贈)

7、北島八穂年譜

1903(明治 36)年…10 月5日、父慎一郎、母いよの二女として青森県青森市莒町に生まれる。本名美代。

1910(明治 43)年…青森市立橋本尋常小学校入学。

1916(大正 5)年…青森県女子師範付属小学校高等科1年に入学。

1917(大正 6)年…青森県立青森高等女学校入学。

1921(大正 10)年…青森県立青森高等女学校卒業。

1922(大正 11)年…実践女学校高等女学部国文専攻科入学。

1923(大正 12)年…実践女学校高等女学部国文専攻科中退。

1924(大正 13)年…青森県東津軽郡浜館尋常小学校、東津軽郡野内尋常高等

- 小学校、東津軽郡浅虫尋常高等小学校の代用教員となる。
- 1926(大正 15)年…浅虫尋常高等小学校を病気退職。脊椎カリエスと診断される。
- 1928(昭和3)年…「改造」の懸賞小説に応募するが落選。しかし、編集者の1人であった深田久彌に励まされて上京を決意する。
- 1929(昭和4)年…深田久彌との新生活が千葉県我孫子で始まるが、結婚は容易に認められなかった。
- 1932(昭和7)年…9月、八穂の健康上の理由から鎌倉に移り住む。
- 1935(昭和 10)年…深田久彌作『津軽の野づら』(作品社)は八穂の自伝的要素が強く、代作といわれている。この頃脊椎カリエスが悪化するが生活のために書き続けた。歩行不能の状態となる。
- 1939(昭和 14)年…『知と愛』(河出書房)、『津軽の野づら』(改造社)は久彌作であったがいずれも八穂が病床で書き、前者はよく売れた。
- 1940(昭和 15)年…3月、深田家に入籍。
- 1945(昭和 20)年…小説「自在人」で初めて北畠八穂のペンネームを使う。岩田豊雄氏(獅子文六)に激賞される。
- 1946(昭和 21)年…児童文学処女作「十二才の半年」を少年少女雑誌「銀河」に発表し、児童文学作家として認められる。
- 1947(昭和 22)年…深田久彌と離婚。奇跡的に歩けるようになる。「ジロウ・ブーテン日記」を雑誌「銀河」に1年間にわたって連載する。
- 1948(昭和 23)年…鎌倉山に転居。この頃より白柳美彦と同居。『あだ名は進化しつつ』刊行、また雑誌「ひまわり」に多くの童話を発表、「月刊東奥」には「冬の旅終りぬー太宰治追悼記ー」を書く。
- 1953(昭和 28)年…『あくたれ童子ポコ』刊行。(光文社)
- 1956(昭和 31)年…蟹田町の太宰文学碑除幕式に参列のため来青。
- 1957(昭和 32)年…『お山の童子と8人の赤ん坊』を書き、ラジオ青森より放送される。
- 1966(昭和 41)年…『東宮妃』刊行。4編の作品中「右足のスキー」に深田久彌との離婚のいきさつが書かれている。装丁は棟方志功。
- 1968(昭和 43)年…『耳のそこのさかな』刊行、これは八穂の祖母がモデル。後「マヨコに雪が降る」の題名で映画化。

1972(昭和 47)年…『鬼を飼うゴロ』により第 10 回野間児童文芸賞、第 19 回サン
ケイ児童出版文化賞大賞受賞。

1974(昭和 49)年…『北畠八穂児童文学全集』全 6 巻刊行開始。

1975(昭和 50)年…『透った人人』刊行、これは故人となった文士の回想録。

1982(昭和 57)年…3月 18 日午後 5 時 2 分、神奈川県川崎市虎ノ門分院で閉塞
性黄疸症にて満 78 歳で死去。